

ゴクンと飲み込んだ食べ物  
は食道へ入ります。食道の長さは約25cmで、断面は左右が約2cm、前後が約1cmの楕円形の管状(くだけょう)臓器で、ふだんは閉じているが、食物が通る時は大きく広がります。食べ物を通る食道の内腔(ないくう)は粘膜におおわれ、粘液が分泌されていて、液体は約1秒、固形物は6〜7秒で通過して胃へ入ります。食道は全体が同じ太さではなく、入り口の他に細い所が2カ所あって、飲み込んだ固形物がかえたり、そこにガンができてしまいます。

食道の末端まで来ると、その刺激で括約筋がゆるんで食物を通します。『のど元過ぎれば熱さを忘れる』苦しかったことを忘れればケロリとも、過ぎ去ればケロリと忘れてしまう』の諺が

## 心とからだの栄養

能岡 浄 [25]

あります。しかし、熱い湯 ありませす。しかし、熱い湯 豆腐などの飲食物や、ト ウガラシなどの香辛料、 強いアルコール飲料を飲 み込むと、それが食道を 通って胃に達するまで、 胸ヤケのような刺激があ り、これが続くと食道ガ ンになったりします。

### 強い刺激で食道ガンにも

人間は『ある期間が過 ぎると忘れる』という能 力を、神仏からさずかっ ているのでしょう。非常 に悲しいことや苦しいこ とを、いつまでも忘れら れない生きて行けませ ん。5年前の阪神大震災 で『この世の生き地獄』 を見て恐怖におののき、 多くの老人が自殺し、記

### 『のど元過ぎれば』の諺あるが

約55年前の終戦の時、 14歳だった作家の五木寛 之氏が「韓国から九州へ 帰国までの数年間は一生 忘れられないような体験 をしたはずなのに、その 記憶がアイマイであり、 忘れることは人間にとっ て非常に大事な『生きる 知恵』のようだ。思い出

したくないことが多すぎ て、忘れることで自分を 守っているのだろう」と 書いておられます。 しかし、作家で尼僧の 瀬戸内寂聴さんは「私た ちは、戦争の悲惨や天災 の被害、恩ある人の思い 出など、絶対に忘れては ならないこともありま す。それでも人間は、大 切で重要なことまでも年 月とともに記憶を薄れさ せ、忘れ去ってしまいま す。だから私たちは、忘 れてはならないことを忘 れないために、終戦記念 日や震災記念日、(故人 の年回法要)などを繰り返 し記憶を新たにすること が人間の智慧でしょ う。そしてそれを、やが て死んで行く世代は、次 の時代の人に伝えて行く 必要があります、そうす ることが義務です。また『過 去のことであって自分に 無関係なことだ』と考え ずに、これらのことを真 面目に聞き、人の痛みを わが痛みと受け取れる想 像力が『人間の言葉 を理解でき、相手と心が 通じ合う真の人間』でし ょう。私たちは『戦争や 震災で亡くなった人々を 忘れず、犠牲者や被災地 の人々の心の痛みを決し て忘れない』と誓うこと が何にもまして被災した 方々に対する礼儀です」という意味のことを語ら れました。これら師の教 訓には心を打たれます。(大阪府立看護大学医療 技術短期大学部・助教授)